

平成23年度

学習意欲を育む学級集団づくり事業取組事例集

平成24年4月

島根県教育庁義務教育課

はじめに

平成23年度学習意欲を育む学級集団づくり事業において、県内の小学校第5学年の児童（特別支援学校の小学部を含む）及び中学校第2学年の生徒（特別支援学校の中学部を含む）を対象に、アンケートQ Uを活用した学級集団づくりの取組を各学校で推進していただきました。本事業は、「①児童生徒個々の状況及び学級集団の状況について客観的に把握するためのアンケート調査を活用し、学力向上の基盤となる学び合い高め合う学級集団の育成を図る。」「②学力向上と生徒指導の一体的な取組を展開し、安心して学校生活を送ることができる学級づくりを推進する。」ことを目的としています。

平成24年度も本事業を活用して、学習意欲を育む学級集団づくりの取組を各学校で推進していただきたいと考えています。各学校の協力を得て作成した本書に収録した事例は、いずれも個別の実態に即したものであり、そのまま導入することは難しいかもしれませんが、各学校の課題に応じた取組の方策を検討するうえで貴重な資料となるものと考えます。本事例集を参考とされ、学習意欲を育む学級集団づくりが一層推進されることを期待します。

平成24年4月

島根県教育庁義務教育課長

矢野 英明

目次

事例については、各学校の学級集団の状況・課題及び取組・成果をキーワードとして掲載しています。

□・・・状況・課題

☆・・・取組・成果

小学校の事例

【小学校 事例1】	1
□親和的なまとまりのある集団 友だち同士の支え合い、学び合いが多い 主体的に活動	
☆現在の学級経営方針を継続 不満足群・侵害行為認知群3名に配慮 国語科・算数科の学習内容の定着	
【小学校 事例2】	3
□複式学級 全員(4名)が満足群 質問したり、発表したりすることに課題	
☆学習意欲の向上 自分の思いや考えを発表する 書く活動、伝える活動の充実	
【小学校 事例3】	5
□複式学級 学習面・家庭環境に課題(不満足群3名) 本人と周りの感じ方にズレ(非承認群1名)	
☆学級全体の人間関係づくり ピア・サポート活動 家庭学習の取組の改善	
【小学校 事例4】	7
□ゆるみの見られる集団 言葉遣いが乱暴 自信をもてない児童の小集団	
☆学級のルール確立 規律ある学習活動 人権意識・仲間意識を育てる授業	
【小学校 事例5】	9
□斜めに伸びた分布の学級 からかいがある 学校生活のルールを守らない数名の児童	
☆アンケートで2つの目標設定・振り返り 授業の見直し 小さいルールから徹底	

中学校の事例

【中学校 事例1】	11
□管理型(かたさの見られる集団) 認められることが少ない生徒	
☆全教職員で共通理解 「アンケートQU活用表」の作成 個別支援 連携	
【中学校 事例2】	13
□ルールや行動規範に課題 承認に課題 かかわりに課題	
☆ルールの確立 学習活動の目標を具体的に提示 不満感をもつ生徒の意見の引き出し 学習意欲の向上	
【中学校 事例3】	15
□半数以上が満足群 要支援群2名は欠席が多い リーダー的な生徒が満足群にいない	
☆K-13法で研修、全職員で連携 情報を共有して授業の中で支援 要支援生徒への具体的な支援計画	
【中学校 事例4】	17
□小規模校 全員が満足群 進路に対する意識が低い ソーシャルスキルに課題	
☆職場体験学習 総合的な学習の時間(自分の言葉で伝える体験)	
【中学校 事例5】	19
□荒れのきざしがみられる学級集団 個人志向のやや強い学級 「配慮」「かかわり」の両スキルが低い	
☆肯定的な声かけ 生徒同士の関係づくり 学び合いの授業	

【資料】

資料1 中学校 事例1について	21
資料2 中学校 事例3について	24
資料3 各学校へのアンケート集計結果	26

【小学校 事例1】

アンケートQUの結果[15名]

侵害行為認知群 2名	満足群 12名
不満足群 1名	非承認群 0名
要支援群 0名	

キーワード (□状況・課題 ☆取組・成果等)

- 親和的なまとまりのある集団
- 友だち同士の支え合い、学び合いが多い
- 主体的に活動
- ☆ 現在の学級経営方針を継続
- ☆ 不満足群・侵害行為認知群3名に配慮
- ☆ 国語科・算数科の学習内容の定着

1 課題 (◇学級の様子 ◆アンケートQUの結果・分析)

- ◇ しっかりとルールが定着している学級集団の中で、子ども同士の人間関係が親和的に形成されており、子ども同士の支え合いや学び合いがとても多く生まれ、学級全体で前向きに活動している。
- ◆ 「親和的なまとまりのある学級集団」と判定され、学校生活意欲総合点の学級平均点が高く、子どもたちは情緒が安定した中で主体的に活動できている。
- ◆ 親和的な雰囲気子どもたち一人一人の学習意欲、友だち関係を形成する意欲、学級活動への参加意欲をさらに高める作用をもっている。
- ◆ 子ども一人一人が活躍する場やみんなが協同する場があり、それを級友や教師からプラスに認められる場面が学級集団での生活や活動の中に多くあると思われる。

2 課題に対する目標

- 現在の学級経営方針を継続するなかで、学級全体が一つの方向にまとまっているときに、それにのれない子どもがいなくどうか留意する。
- いろいろな活動を子どもたち主体で計画・活動・ふりかえりをさせ、適宜全体にアドバイスするようなスタイルで子どもの学校生活意欲の高さを維持する。

3 目標に対する具体的な取組

- 国語科・算数科を中心にして、学習内容の定着を図る。
 - ① 毎日の漢字テストにより、新出漢字の定着を図る。
 - ② 名詩文の暗唱を継続して取り組ませる。
 - ③ 説明文の要旨のまとめ方を修得させる。
 - ④ 物語文の構成を指導し、主題の表し方を修得させる。
 - ⑤ 算数科で操作的作業的な活動を多く取り入れた授業を行い、学習内容の定着を図る。
- 学習のルール (話を聞く態度、発表の仕方) を指導し、定着を図る。
 - 掲示している話型をもとに接続詞を用いた話合いの指導をするとともに、能動的な聞き方(うなづき、視線等)を指導する。

- **自分で善悪を判断し、自分の意志に基づいて行動させる。**
授業中や終礼時の発表（「褒め言葉のシャワー」）などを通して、お互いの長所を認め合うようにさせ、一人一人が活躍できる場を設定する。
- **基本的な生活習慣を身に付けさせる。**
生活習慣の基礎となる早寝早起き朝ご飯、挨拶、返事、靴そろえ、言葉遣い等の意義を機会をとらえ指導する。
- **整理整頓を指導し、生活しやすいように教室環境を整えさせる。**
生活目標を教室の前面に掲示して教室環境を整える意識を高め、適宜自己評価を行わせる。
- **いじめや差別を絶対に許さない雰囲気**を教師が率先してつくる。
 - ①人の心身を傷つける行為や迷惑行為等は、その場ですぐに止めさせ、子どもが納得するように指導する。
 - ②正しい言葉遣いや「さん」付けで名前を呼ぶように心がける。
 - ③観察や調査により、児童が仲間はずれになっていないかなど友人関係を中心に児童の状況を把握する。
 - ④人権アンケートや日記指導を活用して、不安を訴えている児童の言動に留意する。
- **どの子も活躍できる場を設定し、お互いの長所を認め合うようにさせる（認め、励まし、ほめる）。**
委員会活動の実践を通して委員会の一員としての自覚や活動力を高める。また、当番や係の活動を通して学級の一員として仕事を最後までやり通すことの大切さに気付かせる。

4 取組の成果を検証する指標とその結果

学級全体が一つの方向にまとまっているときに、それにのれない子ども（学級生活不満足群1名、侵害行為認知群2名）がいないかどうか留意し、「親和的なまとまりのある学級集団」が維持されるよう、現在の学級経営方針を継続する。

いじめに関するアンケートや教育相談（1学期・3学期は担任、2学期は全教職員で実施）の結果、学級生活不満足群に属していた1名、侵害行為認知群に属していた2名は、学級の中に居場所を見つけていることがうかがわれた。

5 成果と今後の取組

- 学級生活不満足群に属している児童は学習成績や自己肯定感が低い状況である。学習面では、スモールステップでの目標を提示し指導することにより学習成果や学習意欲の向上を図りたい。現在、児童の努力の成果がテスト成績等の結果に目に見える形で現れており、友だちに認められ、自己肯定感を高めつつある。
- 侵害行為認知群の児童は女子同士の関係がうまくいかず、ひとりぼっちでいることがあると感じている。休み時間や掃除の時間など普段の様子を注意して観察し、声をかけている。また、グループ構成の見直しなどを行い、友だちと一緒に活動する場面を増やしていった。現在、学級の中（特に女子の中）で居場所を見つけつつある。

【小学校 事例2】

アンケートQUの結果[4名]

侵害行為認知群 0名	満足群 4名
不満足群 0名	非承認群 0名
要支援群 0名	

キーワード (□状況・課題 ☆取組・成果等)

- 複式学級
- 全員(4名)が満足群
- 質問したり、発表したりすることに課題
- ☆ 学習意欲の向上
- ☆ 自分の思いや考えを発表させる
- ☆ 書く活動、伝える活動の充実

<p>1 課題 (◇学級の様子 ◆アンケートQUの結果・分析)</p> <p>◆ 結果の分析 [学級在籍児童4名 (5年生2名、6年生2名)]</p> <p>① 学級満足度尺度 <結果>学級生活満足群 100% (38%) ※ () 内の数字は全国平均 <分析>本学級には、学級内で孤立し、友人からサポートを得られていないと感じている学級生活不満足群に属する児童がいない。</p> <p>② 学校生活意欲尺度 ア 領域別 <結果>総合33 [友だち関係12 (9.4)、<u>学習意欲10 (9.1)</u>、学級の雰囲気11 (9.2)] <分析>本学級少人数の学級なので、結果をみる際には学級満足度尺度と学校生活意欲尺度の結果を重ね合わせた。児童ごとに「配慮」「かかわり」のスキルの定着状況を確認した。</p> <p>イ ソーシャルスキルの集計 <結果>「配慮」のスキル 28.8 (27.3) 「かかわり」のスキル 27.3 (24.0) <分析>本学級は「配慮」「かかわり」のスキルにおいて良好な状態であると思われる。</p> <p>◆ 学校生活意欲尺度において、「友だち関係」「学級の雰囲気」に比べて「学習意欲」のポイントが低い。全国平均との比較においても3項目の中で「学習意欲」がポイントの差が最も小さい。よって、本学級の学習意欲を高めることが、よりよい学級集団づくりにつながるとと思われる。</p> <p>◆ 学習意欲に関する実態 学校生活意欲尺度において、学習意欲の指標となる項目と得点は次のとおりである。※得点は児童4名の合計。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勉強で、できなかったことができるとうれしい 16点 ・授業中に質問に答えたり発表したりするのは好き 10点 ・よい成績をとったり勉強ができるように努力している 14点 <p>この結果から、<u>授業中に質問に答えたり発表したりすること</u>において課題があり、教師の支援が必要であることが明らかになった。</p>
<p>2 課題に対する目標</p> <p>学級経営の柱として大切にしてきた「自分の思いや考えを進んで発表する」ことについての具体的な取組内容の整理を行う。</p>

3 目標に対する具体的な取組

(1) 自分の考えをもたせる

①「書く」活動を充実させて自分の考えを確かなものにする。

ア 日記を毎日の課題とし、日常生活における発見や感動及び疑問などに向き合う感性を育む。

イ 3～5分程度の短作文（視点を決めて書きたいことを書く）をさせる。

ウ 書きたいことの内容を明確化し、構成図を作成させて原稿用紙に作文を書かせる。

これらの活動においては、体験活動を踏まえさせることや相手意識をもたせることを大切にする。また、授業においては課題解決的な学習場面を多く設定し、「課題を捉える→追究する→整理する→伝え合い・高め合う→振り返る」といった学習過程を大切にする。

②表現力を高める

ア 「話したい」「話そう」という思いをもたせる。

イ 授業において進んで発表する場に加えて、友だちが指名する「つながり発言」の場を設定する。

(2) 自分の考えを伝えさせる

①校内研究と関連させ、全校スピーチで話す場面を設定するとともに、その際の司会・進行、感想・意見発表を充実させる。

ア スピーチをする時は構成図を描かせ、児童が伝えたいことを効果的に表現できるようにする。

イ スピーチした人や質問・感想を発表した人の意図を汲み、スピーチの内容が膨らむように繋げていく。

②児童の思いを発信する場を設定し、積極的に伝えさせる。

ア 場を設定し、町の代表として発信させる。

イ 追究活動の成果や交流活動における学校紹介等を学校内外に発信させる。

4 取組の成果を検証する指標とその結果

(1) 上記3項目についての12月の調査結果

	児童A	児童B	児童C	児童D	合計	平均
6月	9	10	10	11	40	10
12月	11	11	10	12	44	11

上の表に示したとおり、児童4名の合計で4ポイント、平均で1ポイント上がった。課題としていた項目について、4人中3人が「授業中に質問したり答えたり発表したりするのは好き」となった。

(2) 児童の自己評価、学校評価の結果

学期ごとに実施する学校生活に関する児童の自己評価において、1、2学期とも学習への取組に係る評価の結果は高かった。

学校評価において、学級の支持的風土や学習に向かう姿勢、児童相互の人間関係づくりにかかる項目が良好であることが確認された。

5 成果と今後の取組

全校児童13名の極少規模の学校である。5・6年複式学級4名という限られた人間関係ではあるが、本年度は多くの場で発表をしたり、多くの人と交流したりする機会に恵まれた。全教職員の共通理解のもと、全校児童を見守る・指導する実践を行ってきた成果であると考えている。今後も継続していきたい。

【小学校 事例3】

アンケートQUの結果[8名]

侵害行為認知群 0名	満足群 4名
不満足群 3名	非承認群 1名
要支援群 0名	

キーワード (□状況・課題 ☆取組・成果等)

- 複式学級
- 学習面・家庭環境に課題 (不満足群3名)
- 本人と周りの感じ方にズレ(非承認群1名)
- ☆ 学級全体の人間関係づくり
- ☆ ピア・サポート活動
- ☆ 家庭学習の取組の改善

1 課題 (◇学級の様子 ◆アンケートQUの結果・分析)

- ◇ 5、6年生の複式学級である。低・中学年時にも同じメンバーで過ごしており、学年・男女の隔たりがなく仲良く生活している。
- ◇ 6年生に学力面で課題のある児童がいるが、自分たちで学習をすすめることができるようになっており、教え合い、学び合いながら力をつけつつある。
- ◇ 児童数が少人数であるため、一人一人が大勢の前でお礼を述べたり感想を発表したりする機会に恵まれ、突然発言を求められるような場面でもあまり臆することなく話ができる。
- ◇ 持ち物の管理に課題がある男子児童がおり、ゲームソフトの貸し借り等が原因となる問題が発生した。
- ◆ 不満足群に属する3名のうち2名は学習面及び家庭環境に課題があり、あとの1名は家庭環境に課題がある。これらの児童は、自尊感情や自己有用感を十分にもてない状況にあると考えられる。
- ◆ 非承認群に属する1名は、学習面、運動面、生活態度などさまざまな面でよさを発揮している。そのため、賞賛される場面が多いと考えられるが、本人の感じ方と周りの印象は異なっているかもしれない。
- ◆ 不満足群、非承認群に属する児童は、いずれも満足群に近い位置にいる。学級全体の人間関係づくりを進めることで、改善を図りたい。

2 課題に対する目標

仲間との質のよいコミュニケーションや仲間への支援活動を体験的・継続的に行うことを通して、自尊感情や自己有用感を高め、互いに思いやり、助け合い、支え合う人間関係づくりを進める。

3 目標に対する具体的な取組

学習活動の中にピア・サポート活動を取り入れ、仲間同士、支え合い援助し合う関係をつくる。

- ① 対立解消・問題解決スキル、コミュニケーションスキル、協力スキル・信頼感、自己理解・他者理解のためのトレーニングを行う。

- ② 具体的にピア・サポートをプランニングし、ピア・サポート活動を実践して、振り返りを行う。

<具体例>

運動会が近づいてきました。あなたの力で運動会を成功させるために、ピア・サポート活動に取り組んでみませんか。

※ピア・サポートとは

困っている人をちょっと手伝ったり、チームや仲間のためにあなたの力やアイデアを積極的に出したりすることです。

→どんな活動ができそうか、みんなで話し合ってみましょう。

- 1 どんなことに取り組みたい？
- 2 いつ実行する？
- 3 予想される問題→そんなときはどうやって解決する？

4 取組の成果を検証する指標とその結果

指標：児童の日記や感想文、日常の行動等の観察により成果を検証する。(本校の場合、児童、保護者、教職員が少数のため、アンケート等では検証しにくい。)

結果：ピア・サポート活動後の児童の感想

ピア・サポートの活動で「ケンカの仲裁」のやり方を勉強しました。特に、TさんとJくんが飛ばし合いのケンカをしたときは、本当にあんなケンカがあったら大変だなと思いました。でも、「か・い・けつ」のキーワードをもとにして仲裁したら思ったより早く解決できたので、びっくりしました。思わぬ一言で解決に導かれる時もあることが分かりました。

ピア・サポートの勉強で、注意の仕方の練習を実際にやりました。言うことを素直に聞いてくれない役の子を注意するのは大変でした。特に、Nさんのときは、すごく反抗してきて難しかったです。小さい子には、ただおこって注意するのではなく、自分の気持ちを伝えるのだなと思いました。これからも考えながら頑張っていきたいです。

今日、秘密の親切をしました。私は、Nさんにしたけど、Nさんは気がつかなかったそうです。(まあ、当たり前か・・・) 私はTさんに親切をしてもらっていました。今日は、私がおぼん当番だったとき、Tくんがおぼんを配るのを手伝ってくれました。私はうれしかったです。またあるといいなと思いました。

- 児童の感想からは、具体的な学習を通して自分がどのように行動すればいいのかを身に付け、それを実践していこうとする気持ちがうかがわれる。
- 学校生活の中でも、相手の気持ちを考えた行動や上級生として下級生に優しく接する姿が多く見られるようになってきた。その結果、安定した学校生活を送ることができるようになり、家庭学習への取組等にも大きな改善が見られるようになった児童がでてきた。

5 成果と今後の取組

- 年間を通して、ピア・サポート活動を中心に、人間関係づくりに取り組んできた。その結果、上記4に挙げたような改善が見られるようになった。児童一人一人へのきめ細かな対応も大切だが、集団づくりを進めるほうが効果的であると感じた。
- 今年度のピア・サポート活動の取組は、5・6年学級が中心であった。今後、全校でこうした取組を進めていきたい。そのために、全職員が参加した校内研修を3学期に実施した。研修の成果を学校全体で生かしていきたい。

【小学校 事例4】

アンケートQUの結果[27名]

侵害行為認知群 11→3名	満足群 13→20名
不満足群 2→3名	非承認群 1→1名
要支援群 0→0名	

キーワード (□状況、課題 ☆取組・成果等)

- ゆるみの見られる集団
- 言葉遣いが乱暴
- 自信をもてない児童の小集団
- ☆ 学級のルールの確立
- ☆ 規律ある学習活動
- ☆ 人権意識・仲間意識を育てる授業

※右の数字はアンケートQU 2回目（11月実施）の結果

<p>1 課題 (◇学級の様子 ◆アンケートQUの結果・分析)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 明るく素直な児童が多く、のびのび生活している。 ◇ 自己主張ができ満足感を感じている児童もいるが、思いをうまく伝えることができずに学校生活を送っている児童も数名いる。 ◇ 男子の中で言葉遣いが乱暴な児童がいる。 ◇ 自信をもてない児童が小集団を作っている。 ◆ 承認得点は全体的に高く、緊張感も少なく自由に生活や活動をしている。 ◆ 侵害得点に差が見られ、学級のルールや行動規範の定着が不十分である。 ◆ 6月には「ゆるみのみられる集団」と判定される。
<p>2 課題に対する目標</p> <p>誰もが安心して生活できるように学級のルールを確立する。</p>
<p>3 目標に対する具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業や学級での生活で困っていることを話し合う場を設定し、学級のルールを確認 <ul style="list-style-type: none"> ・ 話し合いで確認した授業のルール、学級生活のルールを掲示する。 ・ いろいろな活動場面でルールに沿ってできたことをほめる形で評価する。 ・ 侵害得点の高かった児童を観察するとともに定期的に教育相談を実施し、困り感を共有する場を設定する。 ○ 規律ある学習活動の習慣化 <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の「内容・目的・方法」を明確にし、児童に意識させる。 ・ 説明を短くし、やり方のモデルを示したり、やり方の分かる掲示物や完成品を見せたりする。 ・ 授業の終わりに本時の学習のポイントや取り組んだことを全体に対して確認する。 ○ 人権意識・仲間意識を育てる授業の充実 <ul style="list-style-type: none"> ・ 人権週間に合わせて、日々の何気ない言葉遣いや言動について振り返る場を設定する。 ・ ペア学習やグループ学習を多く設定する。 ・ 学習の中に認め合う場を意図的に設定する。

4 取組の成果を検証する指標とその結果

指標：安心して生活できると感じる児童の人数

検証：課題が見られたアンケートQUの3つの回答状況で検証

(よくある・少しある)	6月		11月
・嫌なことを言われたり、からかわれたりすることがありますか	14名	→	3名
・クラスの人から暴力を振るわれることがありますか	7名	→	0名
・クラスの人から無視されることがありますか	4名	→	0名

5 成果と今後の取組

- 4, 5月には活動的に授業が展開し、児童は全体的にのびのびと生活しているように感じていたが、一部の児童の学習活動への参加意欲が低かった。6月のアンケートQUの結果から、弱い立場の児童の被侵害得点が高いことが分かった。被侵害得点の高かった児童を改めて観察するとともに、個別に教育相談をして、だれもが安心して生活できる学級のルールを確立する必要性を感じた。そこで上記の取組を行い、以下の成果を上げることができた。
- ・学級で確認し合ったルールを意識する児童が増え、相手の気持ちを考えた言葉遣いや言動が増えた。
 - ・侵害行為認知群の児童について、アンケートQUの上記の3つの質問の回答状況から学級内の侵害行為が減り、安心して生活できるようになったことがうかがえた。
 - ・授業では、学習内容とともにルールに沿って活動できたかを評価する（認める）場面を意図的に設定したことにより学習規律が定着してきた。
 - ・ペアやグループ学習を多く設定したことにより、これまで発言の少なかった児童の発言の場が増え、自信をもつようになった。
- 11月のアンケートQUでは、学級内のルールや行動規範が十分定着し、子ども同士の人間関係が良好で、「親和的なまとまりのある集団」であるという結果であった。これまで行ってきた学習規律を定着するための取組を継続するとともに、さらに児童相互の伝え合う力を育てていきたい。また、日頃の児童観察や教育相談をさらに充実させたい。

【小学校 事例5】

アンケートQUの結果[31名]

侵害行為認知群 2名	満足群 9名
不満足群 8名	非承認群 9名
要支援群 3名	

キーワード (□状況・課題 ☆取組・成果等)

- 斜めに伸びた分布の学級
- からかいがある
- 学校生活のルールを守らない数名の児童
- ☆ アンケートで2つの目標設定・振り返り
- ☆ 授業の見直し
- ☆ 小さいルールから徹底

1 課題 (◇学級の様子 ◆アンケートQUの結果・分析)

- ◇ 授業中に関係のないことをしゃべる児童、それに同調する数人の児童がいる。また、他者の発言や言い間違いをからかったり、あげあしを取ったりする。周りの児童はなかなか注意できず、黙っていることが多い。
- ◇ 発言は一部の児童に限られることが多いが、指名すると意見を言うことができる。
- ◇ グループ活動や意見交換がしにくい。
- ◇ 言動が乱暴な児童がいる。
- ◆ 斜めに伸びた分布の学級である。ネガティブアンサーチェックにより、承認得点や侵害得点に係る質問に課題がみられる。数名の児童が学校生活のルールを守らず、自分勝手な言動や乱暴な言動で、友達に嫌な思いをさせていると考える。
- ◆ 学習が分からない、面白くない児童による言動が集団の活動に影響を及ぼしている。友人との関係、担任との関係などのつながりが弱い。信頼関係が築かれていない。
- ◆ 安心して自分の意見を言えるような人間関係が形成されていない。
- ◆ かかわりのスキルの得点が低く、配慮はできるがかかわれないという実態がある。

2 課題に対する目標

- お互いに認め合ったり、励まし合ったりできる関係を築く。
- 落ち着いて学習に取り組めるようにする。

3 目標に対する具体的な取組

- ① 学校生活で困っていることをアンケートにより把握し、学級全体の課題とすることを取り上げて2つの目標を設定した。みんなで学校をよくしていこうと児童に対して話をし、振り返りを毎日行った。
 - ・設定した目標の例：あだ名や嫌な言葉は言わない。授業中の私語はしない。
- ② 授業の見直し
 - ・授業メニューの提示（見通しをもたせる）、すべての児童が参加でき、考えが表せるような内容の教材を準備する。各学習活動の時間を短くしてモジュールで構成する。
- ③ 小さいルールから徹底する。
 - ・できるまで待つ。できたらほめる。

4 取組の成果を検証する指標とその結果

指標：安心して生活できると感じる児童の人数

検証：課題が見られたアンケートQUの回答状況で検証

	(まったくない・あまりない)	5月	11月
・失敗したときクラスの人が励ましてくれることがある		18名	→ 10名
・クラスの人とは協力したり応援したりしてくれる		15名	→ 11名
・自分が発表するとき冷やかさずにしっかり聞いてくれる		16名	→ 13名
	(よくある・少しある)		
・嫌なことを言われたり、からかわれたりしてつらい		17名	→ 12名

5 成果と今後の取組

取組の結果、1学期の終わりには、嫌なことをいう人が減ったり授業中の私語が減ったりして、クラスの状況が少しずつ改善していることを児童自身が評価することができた。2学期も授業改善の結果が出て、集中して静かに学習に取り組む時間が少しずつ増えてきた。

今後の取組としては、上記③の取組や支援体制（学校全体、学年部で学級や子どもたちを見ていく）を継続しながら、次のことに取り組んでいきたい。

- ・友だちとのつながりが弱いので、グループでの活動を取り入れながら、友達との関わり方を練習する。
- ・小グループで一緒によくない行動をとることが見受けられたため、繰り返し指導を行うとともに、子どもたちの思いをこまめに聞いていく。
- ・チャイム着席や授業のはじめと終わりのあいさつなど、小さなルールから着実にできるようにする。ほめる、認めることで定着を促す。
- ・「6年生を送る会」や「人に喜んでもらえる活動」などの取組を通して自尊感情を高める。

【中学校 事例 1】

アンケートQUの結果[21名]

侵害行為認知群 0名	満足群 12名
不満足群 2名	非承認群 7名
要支援群 0名	

キーワード (□状況、課題 ☆取組・成果等)

- 管理型 (かたさの見られる集団)
- 認められることが少ない生徒
- ☆ 全教職員で共通理解
- ☆ 「アンケートQU活用表」の作成
- ☆ 個別支援
- ☆ 連携 (スクールカウンセラー・学年部・教科担当・部活動担当)

1 課題 (◇学級の様子 ◆アンケートQUの結果・分析)

- ◇ 穏やかな雰囲気。男女の仲がよい。
- ◇ 一部の生徒に他の生徒をからかうような言動が見られる。
- ◇ 授業中の挙手・発言が比較的活発で意欲的に参加する生徒が多い。
- ◇ 班長や委員会・生徒会役員などのリーダーに挑戦したがる生徒が多い。
- ◇ ほとんどの生徒が係や当番の仕事に責任をもって取り組む。
- ◆ 縦に伸びた型で、分類は管理型 (かたさの見られる集団) である。
- ◆ 友だちづき合いに不安を抱える生徒や友だちづき合いの意義が分からないという生徒が少数いる。
- ◆ いじめや悪ふざけは受けていないが、学級内で認められることが少ない生徒が7名 (33%) いる。

2 課題に対する目標

生徒同士が相互に理解し合い、協力して物事に取り組むことができる学級づくり

3 目標に対する具体的な取組

- 「アンケートQU活用表」(p.21 資料1)を作成し、分析結果と今後の取組について、全教職員で共通理解を図る。
- 相互理解活動 (エンカウンター、ピアカウンセリングなど) を学級活動等で実施する。
- 授業においてあまり発表しない生徒や苦手意識をもつ生徒を支援する工夫 (グループ学習、ミニティーチャーの活用など) を行う。
- 基礎力テスト、市総体、ロードレース、体育祭などの行事に向けて、学級独自の目標を設定し、協力することを意識づける。
- スクールカウンセラーと連携しながら、生徒の不安や悩みを理解する。
- 学年部、教科担当と連携し、協力を得る。
- 不満足群にいる2名の生徒A、Bと非承認群にいる生徒のうち1名の生徒Cを個別支援対象とし、面談等により状況を把握して、担任、学年部や教科担当、部活動担当を中心とした全教職員で共通理解して支援を行う。

4 取組の成果を検証する指標とその結果

- 生徒指導アンケート（11月実施）の居心地と周囲の関係を示す項目
 - ・「周りの人たちがどのくらい助けになってくれると思うか」→「友だち」という回答が増加。
 - ・「私（たち）のしたことで、他の人に喜んでもらった」
 - ・「私（たち）のしたことで、他の人から感謝された」
 - ・「私（たち）のしたことが、他の人の役に立った」→ポイントが向上。
- 第2回アンケートQU（保護者負担で11月に実施）によるクラスとの関わりを示す項目
 - ・「自分もクラスの活動に貢献していると思う」→肯定的回答が増加。
- 個別支援対象生徒の変化
 - ・生徒A→承認得点、非侵害得点ともに上昇。
 - ・生徒B→あまり変化が見られなかった。
 - ・生徒C→承認得点が大きく上昇。

5 成果と今後の取組

- 「自分もクラスの活動に貢献していると思う」という項目の肯定的回答の増加は、学級独自の目標設定の成果だと思われる。しかし、一部の生徒の意見で目標が決まってしまうたり、目標を達成できなかつたりしたときに、自分たちの学級に誇りが感じられない様子が見受けられる。今後は、いろいろな生徒の意見が反映されるような工夫（特に非承認群の生徒の意見をうまく取り入れる工夫）や目標が達成できなかつたときでも前向きに思考できるように、振り返り方を工夫したい。
- ふざけあいやからかいが見られ、その都度指導を行っている。友だちづき合いについて、ルールの徹底を行うとともに、生徒同士が互いの優しさや思いやりを感じることができるような活動（友だちのよいところについて書いたり発表したりするなど）を取り入れたい。また、からかいなどの行為を行う生徒については、面談などにより状況や原因を把握して、適切な指導や支援を行いたい。
- アンケートQUの結果・分析（5月）により、個別支援を重点的に行ってきた生徒のうち2名には改善の傾向が見られる。継続して支援を行っていきたい。

【中学校 事例2】

アンケートQUの結果[35名]

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px;"> 侵害行為認知群 8→5名 </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px;"> 満足群 16→21名 </div>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px;"> 不満足群 4→2名 </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px;"> 非承認群 7→7名 </div>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px;"> 要支援群 0→0名 </div>	

キーワード (□状況・課題 ☆取組・成果等)

- ルールや行動規範に課題
- 承認に課題
- かかわりに課題
- ☆ ルールの確立
- ☆ 学習活動の目標を具体的に提示
- ☆ 不満感をもつ生徒の意見の引き出し
- ☆ 学習意欲の向上

※右の数字はアンケートQU 2回目（1月実施）の結果

1 課題 (◇学級の様子 ◆アンケートQUの結果・分析)

- ◇ 自分の存在価値を感じる生徒と感じない生徒に分かれている。
 - ◆ 自己主張の得意な特定の生徒の意見でものごとが決まる。
 - ◆ 自己中心的な生徒による私語やルール外の反応で、授業がざわつく。
 - ◆ 自分のことをうまく表現することができない生徒がストレスを抱えている。
- ◇ 担任主導の学級経営の負の面が出て、生徒の主体性や問題解決能力が身につけていない（特に男子）。担任不在の場面では、ルールを守ったり、自主的に行動したりすることができない。
 - ◆ 被侵害得点に差が見られ、学級のルールや行動規範の定着に不十分な面があると考えられる。
 - ◆ ネガティブアンサーチェックにより、承認に係る質問に課題が見られる。自分本位で気ままな行動が許されている面があり、学級生活等において人間関係の衝突が見られる。
 - ◆ ネガティブアンサーチェックにより、かかわりに係る質問に課題が見られる。人とかかわる力（学級で意見を言ったり、自主性を発揮したりするなど）が身に付いていないと考えられる。

2 課題に対する目標

- ① 一人一人が自分の存在感を感じることができる雰囲気づくり
- ② 生徒主体の民主的ルールの確立
- ③ 緊張感ある授業のルールの確立
- ④ 特にピックアップした生徒への全職員の共通理解による支援

3 目標に対する具体的な取組

- ① 「一人一人が自分の存在感を感じることができる雰囲気づくり」に対して
 - グループエンカウンター、班ノートの実施を通して、一人一人が自己表現をする場を設ける。また、一人一人の考えや行動について、積極的に評価して、朝終礼で話す。
 - 個人面談で一人一人の思いを聞いたり、頑張っていることや課題を確認したりして、日ごろから励ますようにする。
 - 合唱コンクールの練習において、一人一人の頑張り等を具体的に評価する。

②「生徒主体の民主的ルール確立」に対して

- 班長会や学級会を開き、学級の課題について協議させたり、学級のルールを決定させたりする。その後の活動について継続的に評価する。

③「緊張感ある授業のルール確立」に対して

- 定期的に生徒に授業態度を評価させて、課題を発見させる。ざわついた授業に不満をもつ生徒を含めるすべての生徒の意見を引き出し生かす。
- 各教科等で授業のルールや発言の仕方を定着させる。生徒の発言に対して、教師は丁寧語で答えたり、生徒には敬語を使わせたりしてなれ合いを払拭する。ルールを守ることができたらほめる。学習活動の目標を具体的に示し、意欲を高める。
- 課題を抱える生徒には、教科担任や学級担任が個別指導をして、困難さを聞いたり、教師の気持ちを伝えたりする。

④「特にピックアップした生徒への全職員の共通理解による支援」に対して

- 支援が必要な生徒について学年部で支援の内容や方法等を協議・決定し、全職員で共通理解する。

4 取組の成果を検証する指標とその結果

○ 指標：学級の中で存在感を得ている生徒の人数

検証：「学級生活満足群」と「不満足群」の割合の変化

結果：学級生活満足群 44%→58% 不満足群 14%→8%

○ 指標：学習意欲が向上した生徒の人数

検証：質問「学校の勉強には進んで取り組んでいる」の肯定的回答の割合の変化

結果：52.8%→63.9%

○ 指標：ルールに基づいた行動ができる雰囲気

検証：アンケートQU「学級満足度尺度からみた学級集団の様子」の記述の変化

結果：1回目「生徒たちの中で学級のルールや行動規範の定着に不十分な面があると想定される。自分本位で気ままな行動が許されている面がある。」

2回目「全体的には、クラス単位で活動する際のルールや行動規範が多く生徒たちに共有されており、生徒たちにとって安心して活動できる場となっている。」

5 成果と今後の取組

<第2回アンケートQU（1月実施）の結果の考察>

①一人一人が自分の存在感を感じることができる雰囲気づくり

行事や学級活動を通じて、一人一人の努力、考えや存在を認め合った。その結果、学級の中で存在感を感じる生徒が増えた。

②生徒主体の民主的ルール確立

ものごとを決める際に、学級委員が主体的に議事進行をしたり、班長会を開催したりするようになった。また、議決したことに対して、全員が協力しようとする態度が形成されつつある。

③緊張感ある授業のルール確立

各教科等の担任から、「授業の取組がよくなった」「意欲が見られる」とプラスの評価を得るようになった。

④特にピックアップした生徒への全職員の共通理解による支援

2名とも意識の変容については、顕著なものは見られなかった。支援の内容・方法等の改善が必要である。

【中学校 事例3】

アンケートQUの結果[35名]

侵害行為認知群 3名	満足群 19名
不満足群 6名	非承認群 5名
要支援群 2名	

キーワード (□状況・課題 ☆取組・成果等)

- 半数以上が満足群
- 要支援群2名は欠席が多い
- リーダー的な生徒が満足群にいない
- ☆ K-13法で研修して全職員で連携
- ☆ 情報を共有して授業の中で支援
- ☆ 要支援生徒への具体的な支援計画

1 課題 (◇学級の様子 ◆アンケートQUの結果・分析)

- ◇ 多くの生徒は、友人関係が良好で、学習や諸活動に意欲的に取り組んでいる。
- ◇ 授業中に数名の男子が私語をするなどし、落ち着いた学習環境を維持できないときがある。
- ◇ ちょっかい、悪ふざけがあり、幼い様子である。
- ◇ 始業の号令や給食の合掌を行うのに時間がかかる。
- ◇ ロッカーや机など身辺整理ができない生徒がいる。
- ◇ 女子が小グループで行動し、まとまりや仲良さを感じられない。
- ◆ 半数以上が満足群に属する生徒であり、自分の意見が言えたり友だちが多かったりするなど、居心地がよいと感じている。部活動、生徒会活動に積極的である。基本的な学習習慣が身につけている。
- ◆ 非承認群の生徒は、自分の意見を認めてもらえる機会が少なく、他に流されたり不満を自分の中に抱え込んだりしがちである。
- ◆ 不満足群(要支援群)の生徒はものごとをネガティブに考える傾向があり、自分の意見がクラスに反映されないと感じている。要支援群の2名は、学級内に友人が少なく、欠席が多い。
- ◆ 以上の特徴と、リーダーになるべき生徒が満足群にいないことから、本学級の問題点を次のように分析。
 - ・リーダーやフォロワーなどの学級の組織化ができておらず、協力の体制が取れない。
 - ・学級内のルールが定着していない。生徒個々の意見が反映されない。
 - ・思いやりや許容的態度に課題があり、互いのよさを認め合っていない。
 - ・協力し合える場や共通の話題が少ない。

2 課題に対する目標

<学級経営>

- ・生徒同士のかかわりを深めるような活動を取り入れたり、一人一人が活躍できる場を設定したりして、頑張ったことに関して、お互いが認め合えるような学級にする。
- ・生徒の観察や個別指導に努める。

<授業の改善>

- ・グループでの話し合い活動を取り入れ、お互いに教え合いができるようにする。
- ・学習規律の定着に努める。

3 目標に対する具体的な取組

- アンケートQUの結果の分析を学年部で行い、全クラスの分析資料を作成し、学年の問題として共通事項を挙げ、改善点を話し合った。
- 本学級を対象に8月1日にK-13法による校内研修を行い、全職員と連携を図り、課題の要因とそれに対する多面的・長期的な支援内容・方法を協議した。

<授業での取組>

- ① 道徳・特別活動で互いを認め合ったり、状況を改善したりする取組を行う。思いやりや受容的態度を育成するために、いいところ探しや言われて嫌な言葉などを挙げて改善することを話し合う。
- ② 各授業者が、気になる生徒のアンケートQUの結果を共有し、学習の中で支援・声かけをしていく。
- ③ 学習規律の定着→始業・終業の挨拶の徹底、グループ活動時の机の合わせ方の改善、意見を言う人に注目し最後まで話を聞くなど。

<授業以外の取組>

- ① 人間関係の構築（体育祭・修学旅行等で）。協力の場づくり。リーダーの養成。役割の自覚。
- ② 教育相談、生活ノートを活用。

<要支援生徒への手立て> (p.24-25 資料2)

- ① 特に支援が必要な生徒（非承認群1名、要支援群1名）に対して個別支援を行う。

4 取組の成果を検証する指標とその結果

- 指標：学級のいごちが悪いと感じている生徒の人数
検証：特に課題となったアンケートQUの3つの項目の回答状況で検証
(全く・あまりそう思わない) 5月 2月
・「勉強や運動等で友人から認められていると思う。」 9名 → 6名
・「何かしようとする時、協力してくれる友人がいる。」 3名 → 1名
(とても・少しそう思う)
・「班をつくる時、班に入れずに残ってしまうことがある。」 6名 → 3名
- 要支援生徒については、観察、教育相談、生活ノート等の記述により検証 (p.24-25 資料2)
自分が出せる場が増え、交友関係が広がった。生活ノートへのコメントが増えて表情がよくなった。

5 成果と今後の取組

- 学年部会、校内研修により、教職員間の共通理解と支援体制ができ、2学期、3学期と支援していく間にも多くの教職員と方向性を確認しながら支援を続けることができた。
- リーダーとして期待する生徒が活動しにくい状況であることが分かり、改善を図るとともに、学級活動や諸行事を通し、学級の協力体制が構築され、リーダーが機能するようになった。
- 授業が以前より落ち着き、教室もきれいになった。生徒指導上のトラブルが減り、出席状況もよくなった。
- 個別の支援が必要な生徒の状態が改善された。(p.24-25 資料2)
- 学級のいごちが悪く、居場所がないと感じている生徒の数が減少した。(上記の検証結果より)
- 生徒の観察、対話、生活ノートなどにより、生徒の状況把握と改善に努めるとともに、個別の支援の必要な生徒をリストアップし、教職員間の連携を図りながら支援を行う。

【中学校 事例4】

アンケートQUの結果[3名]

侵害行為認知群 0名	満足群 全員
不満足群 0名	非承認群 0名
要支援群 0名	

キーワード (□状況・課題 ☆取組・成果等)

- 小規模校
- 全員が満足群
- 進路に対する意識が低い
- ソーシャルスキルに課題
- ☆ 職場体験学習 (進路意識の高揚)
- ☆ 総合的な学習の時間 (自分の言葉で伝える体験)

1 課題 (◇学級の様子 ◆アンケートQUの結果・分析)

- ◇ 学力はあるものの、発言や質問する力が乏しい。
- ◇ 男子は、男子同士や3年男子との交流が多い。
- ◆ 学級満足度尺度の結果より
 - ・ 生徒はすべて学級生活満足群に属している。
 - ・ 侵害行為が少なく、認められていると感じており、学級として良好な状態である。
- ◆ 学級生活意欲プロフィールより
 - ・ 進路意識が全国平均より低く、将来に対して目標がもてていない。
- ◆ ソーシャルスキル尺度の結果より
 - ・ 全体の傾向として、「配慮」「かかわり」の尺度とも低く、特に「かかわり」の面において課題がある。

2 課題に対する目標

- ① 進路に対して積極的に考えていこうとする姿勢を育てる。
- ② お互いが主体的にかかわれる関係づくりをする。

3 目標に対する具体的な取組

- ①について
- ・ 職場体験学習を機に、家庭で働くことや職業について話す機会を設けてもらう。
 - ・ 職業に関する図書や新聞記事などを紹介するなどの環境を整える。
 - ・ 職場体験学習での感想をお互いに伝え合い、自分が体験しなかった職業へも関心をもたせ、職業について考える機会をつくる。
- ②について
- ・ 自分の思いを自分の言葉で伝えられるようにするために、体験や感想をしっかりと話す場面を多く設定する。
 - ・ 毎日の挨拶を自分から大きな声で行えるように指導する。
 - ・ 総合的な学習の時間などのインタビューや電話の場面で、自分の考えがきちんと相手に伝わるような話し方などを指導していく。

4 取組の成果を検証する指標とその結果

指標1：進路に対して積極的に考えていこうとしている。

指標2：お互いが主体的にかかわれる関係づくりができています。

学校アンケートや日常の観察より

指標1について

- 職場体験学習期間中に、活動内容や感想を毎日家庭で話すように生徒に伝え、家庭でも声をかけていただくよう保護者をお願いした。働くことについて家庭で話したことがないと言っていた生徒たちだったが、期間中は失敗したことやうれしかったことなどを話したり、働くことについて家の人の考えを聞いたりして、働くことについて興味を深めた。
- 職業について学習する際に、図書を利用して仕事の内容を調べさせたり、職業について考えることができる記事等を紹介したりした。また、図書館に様々な職業についての図書を入れて紹介した。生徒たちは知っていると思っていた職業についても、仕事内容については知らなかったこともあり、新しい発見をすると共に職業について興味を広げるきっかけになった。
- 職場体験学習を終えて、それぞれが経験した内容や感想を、自分の言葉でしっかりと話すことができた。自分が経験しなかった職業についての話を、意欲的かつ熱心に聞くことができた。

指標2について

- 行事の後の振り返りの時間に、感想を交流した。自分を見つめ、友だちに思いを素直に話すことができた。
- 始業の挨拶などは教員から大きな声を出すように心がけた。声の大きさはまだ十分でなく、引き続き指導をしていく必要がある。
- 地域の人に電話をしたり、インタビューをしたりする機会を総合的な学習の時間等で設けた。伝えたい内容が正確に伝わるように、言葉遣い、声の大きさなどの指導を行った。実際の場面では、生徒は緊張した様子であったが、自分なりに言葉を選らび、分かりやすく話すことを意識していた。

5 成果と今後の取組

<成果>

- 学習意欲、進路意識、ソーシャルスキルなどについて、生徒の実態を把握することができた。
- 日頃の観察とアンケートQUの結果を重ねて分析することで、より確かな実態把握ができた。
- 生徒理解や課題克服に向けての協議を全教職員で行うことができた。

<今後の取組>

- 小規模校から大人数の学校に進むことになるので、友だちづくりや人間関係づくりのスキルをさらに身につけるための取組を考えて推進する。

【中学校 事例5】

アンケートQUの結果[35名]

侵害行為認知群 2名	満足群 15名
不満足群 10名	非承認群 4名
要支援群 4名	

キーワード (□状況・課題 ☆取組・成果等)

- 荒れのきざしがみられる学級集団
- 個人志向のやや強い学級
- 「配慮」「かかわり」の両スキルが低い
- ☆ 肯定的な声かけ
- ☆ 生徒同士の関係づくり
- ☆ 学び合いの授業

1 課題 (◇学級の様子 ◆アンケートQUの結果・分析)

- ◇ 4月当初から、学習には前向きに取り組む学級で、学習課題の解決に向けた取組は熱心である。
- ◇ 生徒間のつながりがやや薄く、互いに関わりあったり教え合ったりする雰囲気は乏しく、個人志向のやや強い学級である。
- ◇ 係活動や当番活動において、与えられた役割を果たすが、他者の様子に配慮することが少ない。
- ◇ 学力低位の生徒が、学習場面で課題解決に困難な場面に遭遇したときに、周囲の生徒に尋ねることが少なく、教科担当者の援助や支援を待っていることが多い。
- ◆ 学級満足度尺度における承認得点と被侵害得点の分布から、満足できている生徒たちと、そうでない生徒たちとに大きく分離している。「荒れのきざしがみられる学級集団」と判定され、不満足感の高い生徒たちは学級内で不適応感が強く、ストレスが高まっていると考えられる。
- ◆ 学級全体の1/4程度の生徒が、学級生活や活動に建設的に取り組む意欲が低下している。これらの生徒の不満足感が、学級全体の活動にブレーキかけるような行動につながりやすく、相対的に満足感の低い生徒もそれに同調していると考えられる。
- ◆ 「配慮」のスキルについては「友人の話は最後まで聞く」、「かかわり」のスキルについては「みんなと同じくらい話をする」を視点とし、小グループでの取組を行う必要があると考える。
- ◆ 要支援群に4名の生徒がいる。うち1名は実技科目のみ本学級に交流学习をしている知的障がい児学級の生徒である。交流学习時間が極めて少ないため、他の生徒との関りが少ないことが主な原因と考えられる。
- ◆ 学校生活意欲総合点において、要配慮生徒が4名いる。うち1名は上記の要支援群の生徒であるが、他の3名については、学習意欲、教師との関係、学級との関係得点が低い。「学習内容を理解するための自分なりの学習の仕方」や「学校内に悩みを相談できる先生がいる」「学校内に気軽に相談できる先生がいる」「クラスの行事に参加したり活動するのは楽しい」「自分もクラスの活動に貢献していると思う」が共通して低得点であり、気軽に相談や話のできる教師や友人がすくないと考えられる。
- ◆ 平素からおとなしく発言の少ない生徒の非侵害得点が比較的高い傾向にあり、学級内での不安をもっていると考えられる。

2 課題に対する目標

- ① 職員からの肯定的な声かけを行う。
- ② 生徒同士の関係づくりを進める。
- ③ これらを特に「学び合い」授業への取組を通して進める。

3 目標に対する具体的な取組

①教職員からの肯定的な声かけ

- ・生活ノートのコメント記入は副担任も加わり、生徒を受け止め認める体制をつくる。
- ・授業記録に生徒の好ましい言動も記載し、お互いに伝え合う。
- ・肯定的な言葉を生徒に伝える。その機会も増やす。

②生徒同士の関係づくり

- ・生徒同士が肯定的に関われるようにする。
- ・自己理解・他者理解を深めるための活動を行い、振り返りを大切にする。
- ・関係づくりのスキルトレーニングを学年部単位で実施する。

③「学び合い」授業への取組（これまでの取組を一層推進する）

- ・生徒と生徒をつなぐ取組とグループ学習の充実をする。
- ・教師が生徒の話や発言を聴く姿勢を見せる。

④その他

- ・生徒が不適切な言葉を使ったら、別の言葉に言い換えをさせる。教師も言葉遣いに気をつける。
- ・進路学習を一層充実させる。
- ・養護教諭や部活動顧問によるカウンセリングや副担任による教育相談の場を設ける。

4 取組の成果を検証する指標とその結果

指標1：進路に対して積極的に考えていこうとしている

検証：2学期末に校内で実施するアンケートQUの結果

	6月	→	12月
結果：要支援群の人数	4名	→	1名
学級生活不満足群の人数	10名	→	8名
プロット	荒れ始めの学級	→	管理型の学級

指標2：学級・学校内で気軽に話せる友人や教師がいるという割合。

検証及び結果：2学期末に校内で実施するアンケートQUの次の質問の回答状況で検証

(全く・あまりそう思わない)	6月	→	12月
・学校内に気軽に話せる友人がいる	6.4%	→	0%
・学校内で私を認めてくれる先生がいる	22.6%	→	16.1%
・学校内に悩みを相談できる先生がいる	32.1%	→	42.0%
・クラスの行事に参加したり活動するのは楽しい	12.9%	→	9.7%
・自分もクラスの活動に貢献していると思う	18.4%	→	18.4%

指標3：学習や活動における他者との関わりや配慮ができる割合

検証及び結果：1学期末及び2学期末に校内アンケートを実施し、次の質問の回答状況で検証

(とても・少しそう思う)	1学期末	→	2学期末
・授業が分かりやすかった	66.9%	→	69.6%
・正しいマナー・礼儀を知ることができた	91.1%	→	92.7%
・場に応じた言葉遣いや行動がとれていた	83.9%	→	87.1%
・正しいマナー・礼儀等ができるように心がけた	87.8%	→	91.1%
・自分の役割に責任をもって時間いっぱい行った	77.4%	→	79.0%

5 成果と今後の取組

6月は「荒れ始めの学級」との診断であったが、「学び合い」授業を進め、小グループでの活動場面において、生徒同士をつなぐ取組を推進してきた。学級満足度尺度の分布における学校生活不満足群の生徒が減少し、全体的に分布が右上に移動している。クラスでの非承認度及び被侵害認知度はともに減少している。

アンケートQU活用表(第1回)

作成日 6月20日

2年〇組	QU実施日	5月30日	担任名	〇〇 〇〇
〇学級の全体像 (プロット図) からわかる学級の状態と課題 (型の分類、学級のレベル等)				
管理型⑤ かたさの見られる集団 レベル2を満たしていない				
〇個別 (緊急) 支援を必要とする生徒とその対応計画				
氏名	具体的な状況 (群の分類等)		具体的な対応策	
A	非承認群		特別支援的な対応につなげる	
B	学級生活不満足群		面談により不満足の内容を理解して対応	
C	学級生活不満足群		面談により不満足の内容を理解して対応	
☆目指す集団 「〇〇中〇〇宣言」を達成する集団となっているか。				
〇学年部等での今後の計画 (ケース会議、推進会議等)				
〇学級の状況、課題への対応 【具体的にだれが何をするかを明記する】				
第1回1期対応 (期間 6月20日～9月10日)				
サブゴール (生徒同士が相互に理解し合い、協力してものごとに取り組む)				
〇日常の学級経営を通しての対応 <ul style="list-style-type: none"> ・学活での相互理解活動 (エンカウンター、ピアカウンセリング等) ・日直 (ペア) での活動 (仕事、終礼時のスピーチ) ・班長体験 				
〇授業での対応 <ul style="list-style-type: none"> ・学習に苦手意識をもつ生徒を支える雰囲気づくり 				
〇行事等を活用した対応 <ul style="list-style-type: none"> ・学級で目標を設定して行事に取り組む (基礎力テスト、市総体、体育祭準備など) ※掲示物作成 ・弁論発表会 				
〇校内組織との連携での対応 <ul style="list-style-type: none"> ・学年部、教科担当との連絡 ・特別支援 				
〇その他の取組				

第1回2期対応	(期間 9月22日～12月22日)
<p>【前回の対応から】・多くの生徒がみんなのためという意識をもって目標達成のために努力した。</p> <p>・立場の違う友だちの気持ちを理解する態度が育っていない。</p>	
<p>サブゴール（協力しながら、一人一人の気持ちを深く理解する）</p>	
<p>○日常の学級経営を通しての対応・・・引き続き1期対応に取り組みながら、一人一人の気持ちを大切に にする指導を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学活での相互理解活動（エンカウンター、ピアカウンセリング等） ・日直（ペア）での活動（仕事、終礼時のスピーチ） ・班長体験 <p>○授業での対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机間指導やミニティーチャーの活用を工夫して、苦手な生徒を支える雰囲気をつくる。 <p>○行事等を活用した対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級で目標を設定して行事に取り組む（基礎力テスト、文化祭など）※掲示物作成 <p>○校内組織との連携での対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年部、教科担当との連絡 ・特別支援 <p>○その他の取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育相談 	
第1回3期対応	(期間 月 日～ 月 日)
以下省略	

アンケートQU活用表(第2回)

作成日 1月12日

2年〇組	QU実施日	11月15日	担任名	〇〇 〇〇
<p>○学級の全体像（プロット図）からわかる学級の状態と課題（型の分類、学級のレベル、<u>前回との比較</u>等）</p> <p>【型の分類と学級レベル】 管理型⑤ かたさの見られる集団 レベル2を満たしていない</p> <p>【前回との比較】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・型はあまり変わらないが、非承認群の生徒がやや増えた。 ・前回の対応を見直し、改善を図る必要がある。特に行事等での目標設定では、全体の意見を聞いて目標を決めたり、非承認群にいる生徒の意見を取り上げたりしたい。また、学活での相互理解活動があまり進まなかったので、積極的に進めていきたい。 ・個別支援対象の生徒〇〇が前は学級生活不満足群の要支援に近い位置にいたが、今回は非承認群の比較的高い位置まで移動している。少しずつ集団になじみ、笑顔も見られるようになった。こまめに声かけを行ったり班長などの責任のある立場に指名したり、活躍の場をつくった。今後も同様の支援をしていきたい。 ・前は学級生活満足群にいた生徒□□が侵害行為認知群と学級生活満足群の境界に移動した。2学期は気持ちが不安定になることが多かったが、その都度自ら養護教諭や担任、S・Cに相談して解決や悩 				

<p>みの解消に努めた。今後も連携してしっかり話を聞くような支援をしていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒△△が学級生活不満足群に移動した。特定の生徒としかコミュニケーションがとれず、友だちよりも教員に話しかけることが多い。1～2学期を経て、改善されているように思えたのだが、結果は以前より悪くなっているため、面談や声かけなどを頻繁に行い、状況や気持ちの理解に努めたい。 		
○個別（緊急）支援を必要とする生徒とその対応計画		
氏名	具体的な状況（群の分類等）	具体的な対応策
A	侵害行為認知群	こまめに肯定的な声をかけ、気持ちを理解する。
D	学級生活不満足群	面談、声かけで状況や気持ちを理解する。本人と教師の2人きりではなく、なるべく近くの生徒や仲のよい生徒を巻き込んで複数での会話をする。
C	学級生活不満足群	周囲を気にしすぎる傾向があるので、生活委員長として全体を動かす経験の中で、適切なアドバイスを行う。
E	非承認群	特に学習に苦手意識があるので学習の支援を中心にやっていく。
F	非承認群	特に学習に苦手意識があるので学習の支援を中心にやっていく。
G	非承認群	目立たないが、よく気がつく面があるので、全体の場でもしっかり認め、全体からも承認される機会をつくる。
☆目指す集団 「〇〇中〇〇宣言」を達成する集団となっているか。		
○学年部等での今後の計画（ケース会議、推進会議等） 学年部会での個別支援対応生徒の相談と共通理解		
○学級の状況、課題への対応 【具体的にだれが何をすることを明記する】		
第2回対応 （期間 1月7日～3月31日）		
重点目標（お互いを理解し、相手への思いやりを言葉や態度に表して人間関係づくりをする）		
○日常の学級経営を通しての対応 <ul style="list-style-type: none"> 学活での相互理解活動・・・2学期あまりできなかったため積極的にやる。 班長体験 ○授業での対応 <ul style="list-style-type: none"> 日直（ペア）での活動 期間指導やミニティーチャーの活用 ○行事等を活用した対応 <ul style="list-style-type: none"> 学級独自の目標設定・・・全員の意見、非承認群の生徒の意見が反映されるよう工夫する。 ○校内組織との連携での対応 <ul style="list-style-type: none"> 学年部、教科担当、部活動担当との連携 ○その他の取組 <ul style="list-style-type: none"> 教育相談 		
○取組を終えて（感想、有効な手立て、次年度への引継ぎ事項等）		

○ 具体的な支援の方法とその成果 ～Aさんの場合～

(1) Aさんについて

Aさんの特徴を日常の観察や連絡帳などの提出物、アンケートQUの結果から示す。

- ① 友人に限られており、いつも同じ生徒と行動することが多い。
- ② 進路に対する意識がとて低く、将来の夢などが無い。
- ③ 他人を思いやる気持ちが欠けており、短気である。
- ④ 連絡帳、申込書等提出物の提出率が高く、締め切り前にはほとんど出すことができる。

以上のような特徴を踏まえて、Aさんについての支援の方向性は、「連絡帳の『一日の生活と反省』欄などを用いながらコミュニケーションを図り、進路や将来について考える授業を行いながら、幅広い人間関係を築くことができるよう支援する」こととした。

(2) 各学期の支援の方法

各学期の具体的な支援の方法は次のとおりである。

【2学期】

- ・ 修学旅行の班編成の工夫
- ・ 専門委員会を通しての生徒会活動への参加
- ・ 特別活動における多様な個性を認め合う力を高める授業

【3学期】

- ・ 連絡帳を用いた進路指導
- ・ 個人面談を用いての悩みの理解と改善策の提案
- ・ アサーティブな表現を身に付けるための特別活動の授業

(3) 支援の成果

大きく2つの成果が見られるようになった。

① 友好関係の広がり

以前は限られた友人とのみ行動し、移動教室や昼休みなども自分からその生徒のもとへ行き、行動していた。しかし、2学期に行った修学旅行班編成の工夫において、仲のよい友人と班を分け、新しい友人と交流する機会を設けた。班編成を発表した際には不安な表情を見せていたが、学習を進めていくごとに少しずつ表情も明るくなり、修学旅行は満足して過ごすことができた。また、下半期には整備委員の仕事を行った。毎日の掃除用具点検や体育祭・文化祭における委員会活動を通して、学年やクラスの枠を超えて多くの生徒の教職員とコミュニケーションをとることができた。仕事も熱心に行っており、同じ整備委員の女子生徒は、「一生懸命仕事をしてくれるので、好感がもてます」と話していた。

② 進路・就職に対する意識の高揚

1学期の個人面談では、将来の進路について、「特に考えておらず、目標とする職業もない」と話していた。そこで、3学期には主に総合的な学習の時間や特別活動の授業を用いて、「高校調べ」や「未来予想図を作成しよう」というテーマのもと進路学習を行い、自分の適性や進路を考えた。また、それらの学習と平行して「自分の好みを考えよう、相手の好みを受け入れよう」という、他者に対する受容的な態度の育成やアサーティブな主張ができるようになることをねらいとした授業を行った。その結果、進路に対する高揚が見られた。また、自分の好みを考える際には悩みながら自分の特性や強みについて考え、他者を受け入れ、他者から学び取ろうとする姿勢が見られた。

○ 具体的な支援の方法とその成果 ～Bさんの場合～

(1) Bさんについて

Bさんの特徴を日常の観察や連絡帳などの提出物、アンケートQUの結果から示す。

- ① 友人が限られており、いつも同じ生徒と行動することが多い。
- ② 学級に対する満足度は低いが、進路・就職意識は高い。
- ③ 部活動を熱心に行っており、後輩を指導しようとする姿が見られる。
- ④ 連絡帳、申込書等提出物の提出率が低く、締め切りに間に合うことは少ない。

以上のような特徴を踏まえて、Bさんについての支援の方向性は、「部活動や学校行事を熱心に取り組み、後輩や同級生と関わっていく中で人とかかわることの大切さを学び、集団生活の中で自分の役割を果たしていくことができるように支援する」こととした。

(2) 各学期の支援の方法

各学期の具体的な支援の方法は次のとおりである。

【2学期】

- ・ 定期的な個人面談と家庭との連携
- ・ 部活動における一人一役活動
- ・ 文化祭の合唱コンクールでのリーダー経験

【3学期】

- ・ 学級内における一人一役活動
- ・ 連絡帳を用いて提出物の催促
- ・ アサーティブな表現を身につけるための特別活動の授業

(3) 支援の成果

大きく2つの成果が見られるようになった。

①学級内での満足度の向上

2学期の修学旅行の班編成発表時には、苦手な男子生徒と同じ班のメンバーになったことで、修学旅行にはいけないと感じていた。しかし、担任や一年時の担任、学年主任と定期的に個人面談を行う中で、少しずつ班の話し合いに参加することができた。修学旅行当日の京都市内一日自主研修では、班のメンバーと協力して研修を終えることができた。研修の感想を聞くと、「研修していて楽しかった。また来たい。」と話していた。その後、文化祭の合唱コンクールでは女子生徒をまとめる役を自分から引き受け、試行錯誤しながら発声法や歌唱法を教えていた。当日は多くの女子生徒から感謝され、「パートリーダーをやってよかった。」と述べた。3学期に行った個人面談では、「2学期に比べ学級での満足度は高くなっており、話せる友人も増えた。」と話していた。

②基本的な生活習慣の向上

11月に3年生が引退し、新部長・新副部長を現2年生から選出する際に、「副部長になりたい」と担任に相談してきた。実際には副部長に慣れなかったため意気消沈していたが、その後、後輩を指導する役を与えられ、「手本になるような先輩になりたいので、これから提出物はきちんと出します。」と伝えた。夏休みの課題はほとんど提出できなかったが、冬休みの宿題はほとんど提出し、連絡帳も毎日提出するようになった。連絡帳の「一日の生活と反省」欄には主として部活動のことを書き、1・2学期に比べて積極的に生活していこうとする姿が見られた。

平成23年度学習意欲を育む学級集団づくり事業実施における各学校の実施状況・意識等の集計結果

【調査方法】

(1) 調査方法 平成23年度学習意欲を育む学級集団づくり事業実施成果報告書に掲載の質問で、本事業実施校に照会。

(2) 調査対象

- 市町村立小学校 225校
 ○県立特別支援学校(小学部) 1校 ※調査内容3は無回答
 ○市町村立中学校 100校
 ○県立特別支援学校(中学部) 4校 ※4校のうち1校が調査内容3は無回答

※実施対象学年が欠学年等の理由により、本事業を未実施の学校については、本調査対象から除いた。

【調査の期間】

平成23年4月～平成24年3月

【調査の実施時期】

平成23年12月～平成24年2月

【調査内容】

- 1 貴校における平成23年度のアンケートQU実施回数(実施予定を含む)を記入してください。

学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
実施回数									

- 2 県の事業(小学校第5学年、中学校第2学年で年1回)以外でアンケートQUを実施している場合、その費用負担について、あてはまるものを(1)～(3)の中から選んで○をつけてください。

- (1) 市町村教育委員会負担
 (2) 保護者負担
 (3) その他()

- 3 次の(1)～(5)のそれぞれについて、あてはまるものを1～4の中から選んで○をつけてください。

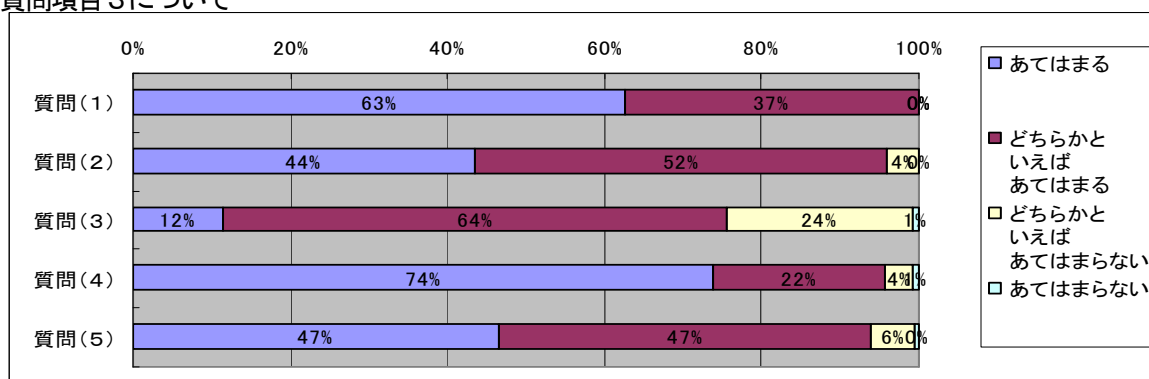
	あてはまる	どちらかといえ あてはまる	どちらかといえ あてはまらない	あてはまらない
(1) アンケートQUの実施は児童生徒や学級の状態把握に役立つ……………	1	2	3	4
(2) アンケートQUの活用は学級集団づくりに役立つ……………	1	2	3	4
(3) アンケートQUの活用は児童生徒の学習意欲向上に役立つ……………	1	2	3	4
(4) アンケートQUの結果を複数の教員等で共有した……………	1	2	3	4
(5) 次年度もアンケートQUを活用したい……………	1	2	3	4

【調査結果】

小 学 校

	質問項目 1						質問項目 2		質問項目 3					
	小 1	小 2	小 3	小 4	小 5	小 6	費用負担		回答1	質問 (1)	質問 (2)	質問 (3)	質問 (4)	質問 (5)
1回実施	27	28	32	29	126	60	市町村	62	回答1	141	98	26	166	105
2回実施	11	14	14	51	91	68	保護者	9	回答2	84	118	144	49	106
3回実施	0	0	0	5	9	5	その他	46	回答3	0	9	53	8	13
									回答4	0	0	2	2	1

質問項目 3について



中 学 校

	質問項目 1				質問項目 2		質問項目 3					
	中 1	中 2	中 3	—	費用負担		回答1	質問 (1)	質問 (2)	質問 (3)	質問 (4)	質問 (5)
1回実施	13	40	16	—	市町村	41	回答1	67	44	8	79	59
2回実施	49	62	43	—	保護者	19	回答2	35	57	72	21	39
3回実施	2	2	2	—	その他	11	回答3	0	2	23	3	3
							回答4	1	0	0	0	2

質問項目 3について

